

第21回豊橋市小中高特連携教育推進協議会議事要録

平成30年2月14日 開 催

豊 橋 市 教 育 委 員 会

第21回 豊橋市小中高連携教育推進協議会	
日時	平成30年2月14日(水) 午後3時～午後5時05分
場所	豊橋市役所8階 東85会議室
構成員	山西正泰 教育長 渡辺嘉郎 教育委員 川村昌宏 時習館高校長 木下勝義 豊橋南高校長 加藤勝啓 豊橋聾学校教頭 小出志郎 南稜中学校長 水野純夫 松山小学校長 加藤喜康 教育部長 (欠席者：白井由美子 豊橋商業高校長 中野弘二 くすのき特別支援学校長)
オブザーバー	加藤 英雄 東三河教育事務所指導主事 鈴木あき子 新城市教育委員会指導主事
事務局	山本誠二 教育政策課長 木下智弘 学校教育課長 角野洋子 教育政策課主幹 他、全7名

議 事 日 程

1 議題

- (1) 平成29年度各分科会の活動状況・成果及び次年度の活動について
 - ① 英語教育分科会
 - ② 理科学教育分科会
 - ③ 特別支援教育分科会
 - ◎ 食育・食農教育について(状況報告)

2 その他

- (1) 東三河小中高特連携教育の推進について

■平成29年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会会長 高橋豊彦 教育委員の挨拶
○欠席者に代わる代理出席者の紹介

1 議題

(1) 平成29年度各分科会の活動状況・成果及び次年度の活動について

①【英語教育分科会】佐藤充宏 分科会委員長（豊岡中学校長）

■「平成29年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会報告書」により報告

○5つの成果

- 1) 校種間の理解を深めるため、小中高特学校教員が参加する授業研究会と情報交換会を年間6回開催した。(授業公開：小中各1回、高校3回 研究部研究大会1回)
 - ・東三河管内県立高校への案内文配付により、市外高校教員の参加が増加した。
- 2) 小中学生や教員に英語教育に対する意識調査・分析を行った。
 - ・連携教育推進にあたって、多くの肯定的な意見を得た。
- 3) 中学生対象のイングリッシュキャンプでは、豊橋東高校生の協力を得た。
- 4) くすのき特別支援学校高等部に、豊橋市ALTを派遣し英語活動を活発化した。
 - ・子どもたちは、生き生きと英語活動に取り組んだ。
- 5) 高校教員の初任者研修に、豊橋市の夏休み英語体験活動への参加が取り入れられ、成章高校教員が参加した。

○次年度への課題

- 1) 異校種の英語授業を参観し、より多くの情報交換を行うことができるよう、各校長に依頼をする。
- 2) 英語教育に関する意識調査を小学校3年生から高校3年生までを対象に実施し、過年度実施分と比較検証・分析する中で、小中高特連携教育のさらなる推進を図る。

<豊橋東高 齋藤教頭>

7月後半と8月後半の2回、豊橋東高校国際理解コース生徒（30名ほど）がALT（10名ほど）のサポートを受けて、国際交流協会で発表している。小中学生も実りある活動だったとアンケートに答えている。

<南稜中 小出校長>

南稜中在籍のALTがくすのき特別支援学校に派遣された。派遣されたALTからは、「とても素晴らしい経験だったので、来年度も機会があればぜひ参加したい」、「高等部の生徒はとても積極的に活動に取り組んでいるので、とても有意義だった」などの報告を受けた。このような状況下、来年度も継続してもらいたいと感じた。

<司会：高橋教育委員>

特別支援ならではの指導する難しさや意義を、南稜中のALTはどのように捉えているのか。

<南稜中 小出校長>

「特別支援学校だから指導が難しい」と、ALTは言っていない。南稜中でも、特別支援学級の生徒に対して、何ら問題なく指導をしている。

<渡辺 教育委員>

英会話に関するアンケート結果（小3～中3）では、「英語教育が楽しい」と感じる児童生徒数は、年齢が上がるにつれて減ってきている。授業内容が年々難しくなるので致し方ない面もあると思う。英語嫌いを作らない手だてをどのように考えているのか。

<豊岡中 佐藤校長 英語分科会委員長>

英語の学びはじめの小学校3年生に対しては、ゲームや歌などを手だてにして導入をする。「英語が好き」という思いをもち続けさせるためにも、基礎力（4技能）の力を伸ばすように英語研究部と連携し、「わかって楽しい」ということを推し進める。

<渡辺 教育委員>

英語力の上位を伸ばすことも大切だが、下位の子どもたちをしっかりと支えることを考えていただき、英語嫌いな子をつくらないでほしい。

②【理科学教育分科会】川村昌宏 分科会委員長（時習館高校長）

■「平成29年度豊橋市小中高特連携教育推進協議会報告書」により報告

- 小中高教員が交流するにあたっては、授業で活かすことができるようになることが大切なことだと考えている。
- 高校教員による理科実験講習会を開催したところ、市内小中高教員以外に市外から5名の参加者があった。また、中学校の公開授業に高校教員が参加して、情報共有を図るとともに、異なる角度から意見交換を実施することができた。
- 公開授業については、異校種の教員参加を増やしていくことが課題である。
- 豊橋工業高校の公開授業を参観した教員が、「小中学校で使用するロボットや実験器具等の製作を工業高校にお願いできないか」と要望したところ、高校側から前向きな回答が返ってきた。
- 高校教員が、小中学校理科研究部の会合に参加して、実験の方法等理科学全般に対して助言できる環境が整備されれば素晴らしい。

<豊橋工業高 吉田校長>

実習機材の製作等については、7～8年前から理科学分科会で情報提供してきているので、これからも積極的に相談してほしい。

人口減少が加速的に進む今日、子どもたちに身につけさせたい力として、愛知県の教育施策の一つとして、STEM教育(サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、マスマティクス)がある。この4つの分野を含め、子どもたちの視野を広げるような教育を推進すべきであろうと考えている。3年間の研究指定を受けた豊橋工業高校では、これにアート(デザインや使いやすさなど)を加えてSTEAM教育に取り組んでいく。

<八町小 伊丹校長>

2年後の大学入試の変更に伴い、思考力を問う問題に耐えうる力を子どもたちにつけさせなければいけない。理科は実験や体験を生かした問題解決的な学習をしやすい教科であるが、高校入試が近づいてくると、問題解決的な学習をやっている余裕はなくなりがちであり、結果として理科嫌いの児童生徒をつくってしまう傾向にある。

そんな中、吉田校長から高校の理科学教育の取り組みについての情報を聞き、小中学校で取り組んでいる問題解決的な学習の重要性について再確認できた。

<前芝中 谷中校長>

小学校段階から、専門性のある理科教員が指導し、中学校に引き継ぐことで理科好きな子どもを育成しやすくなる。今後は、研究部活動や公開授業など、小中高異校種の教員が関わりやすく参加しやすい仕組みを整備していくことが必要になる。

<司会：高橋教育委員>

理科学教育において、公開授業の参加人数が減った原因はどこにあるのか。

<時習館高 川村校長>

異校種の研究会開催日等との日程調整(公開授業日)が難しいのが主因である。

<前芝中 谷中校長>

小中学校教員は夏季休業中に開催される各種研修会(市教委主催)に参加する。理科教育講座などの場を高校とつなげてみたり関連づけてみたりしてはどうだろうか。

<豊丘高 本多校長>

小中学生のころから好きな理科を高校でも追究するためには、苦手な数学の力が必要になるため必然に迫られて勉強をした。

自分は小さいころから理科好きだった。その理由を考えてみると、小学生のころテレビで見た鉄腕アトムの影響を強く受けたと思う。小さいころの些細なことがきっかけになって、その子の趣向を決めるようにもなる。その子にとって、何か好きなものができれば（出会えれば）、嫌いなものを乗り越えていくことができるのではないか。

<朝倉 教育委員>

幼少期の体験がとても大切であると改めて感じた。小学校の先生は、子どもたちに「なんでだろう」と思わせるように、はたらきかけることが必要になり、このことがその子の生涯にわたって影響を及ぼしてくることもある。各先生が自身の得意分野を生かし、生き生きとした表情で子どもたちにはたらきかけることが重要になってくるのではないか。教員が得意分野を深めるような勉強会を開いたり、指導力を高めたりする研修会があってもよいのではないだろうか。

<司会：高橋教育委員>

「好き」や「楽しい」という言葉が、子どもたちの成長にとって大切な要素になっているようだ。

<渡辺 教育委員>

豊橋市自然史博物館が推し進めている東三河ジオパーク構想を、何年後かには登録するまで引き上げたいと考えているようだ。小中高校が連携して、地元のを共通の題材にして取り組んでいくことはできないだろうか。地元のことなので、子どもたちが興味関心をもちやすいのではないだろうか。

<豊橋南高 木下校長>

理科学教育の公開授業への参加人数が減ったということを考えるにあたっては、教員の多忙感の視点は外せない。現存する大学講座研究会やEテレ講座等を上手に拾い上げ、有効利用できるようにしたい。中高研究会の日程調整をして、より多くの人に集まってもらえるように仕組んでいきたい。

③【特別支援教育分科会】久野哲司 分科会副委員長（豊橋市立牟呂小学校長）

■「平成29年度豊橋市小中高連携教育推進協議会報告書」により報告

○幼保小中高校の情報引き継ぎと連携のあり方について検討した。

・昨年度作成した「豊橋版 個別の教育支援計画の活用と手引き この子の未来のために」の配付等によって、各校で「個別の教育支援計画」の作成が広がった。

○「個別の教育支援計画と引き継ぎの手引き」の見直しを行った。

・教育支援計画と教育指導計画の様式について、検討を加える。

○各種研修のさらなる充実に向け、アンケートを実施して分析した。

- ・小中学校の公開授業、授業研究会にこども園、幼稚園、保育園職員が参加し、実践交流をすることができた。

<教育長>

以前から、中学校から高校への「個別の教育支援計画」引き継ぎが問題になっている。平成30年度末には実施をしていきたい。中学校最後の懇談会で、「個別の教育支援計画」をもっている保護者に対して、「合格発表後に、個別の教育支援計画を高校に引き継いでもらいたい」と伝え、このことを中学校側から発信していく。そして、豊橋市で円滑に事が運んだら、東三河全体に広げていきたい。

<時習館高 川村校長>

「個別の特別支援計画」の引き継ぎを、ぜひ実施していただきたい。また、中学校が保護者に説明する内容（依頼文書の写し等）を高校側にも知らせてほしい。

<東陽中 池崎校長>

中学校側は、「その子のために何がいちばん大切なことなのか」について、保護者に理解してもらえるようにする必要がある。高校に「個別の教育支援計画」がきちんと引き継がれるようになればすばらしい。これについては、豊橋市全体が足並みをそろえて、実施することがさらに重要になる。

<教育長>

中学校最後の懇談会（進路決定）までに、校長宛てと校長から保護者宛て文書を、市教委として準備する。なお、この文書を高校に提供する。

<時習館高 川村校長>

「個別の教育支援計画」引き継ぎに関する保護者宛て文書（写し）を、毎年この時期に高校へ送付してもらえるとありがたい。

<豊橋南高 木下校長>

合格者出校日で来校した保護者が、どこに相談へ行ってよいのか戸惑う場面を何度も見てきた。高校側が各相談窓口をわかりやすく説明できていなかったのではないかとという反省がある。今年度は、高校側として、保護者に対して丁寧に説明し、相談しやすい環境を整備していくべきだと思う。

<豊橋高 花井校長>

豊橋高校では、生徒入学後、保護者全員と面談をする。「個別の教育支援計画」を中学校では作成していたが、高校ではその作成を拒む保護者がいる。

入学してくる生徒に、学校に対するきちんとした第一印象をもたせることが、円滑な学校生活を送ることにとって重要。また、なんらかの事案が起こったときには、先手を打って、きちんと対応することで、生徒や保護者とよりよい関係をつくることができる。

<豊橋特別支援学校 山本教頭>

高等部に進学してくる全生徒の「個別の教育支援計画」は届けられてくる。これをもとにして保護者と面談し、必要とされる配慮や留意事項、生徒や保護者の思い等について伝えると保護者は安心する。また、進級後の面談等で、新担任が保護者に同じことを言わせないようにすることが、学校に対する保護者の信頼にもつながる。こういった意味においても、「個別の教育支援計画」の作成・引き継ぎは重要である。ただし、子どもたちの成長を捉えて、きちんと書き直していくことを忘れてはならない。

<教育長>

保護者の了解を得て学校が送付する場合と保護者が直接持参する場合とが混在しているようなので、「個別の教育支援計画」を高校に届ける方法等について、市教委できちんと検討し、よりよい方法を探っていく。

<松山小 水野校長>

特別支援教育に関して、電話相談の際には迅速な対応をしていただいたり、小中学校訪問時の事例検討会では的確なアドバイスをいただいたりするなど、くすのき特別支援学校等のセンター的機能が年々充実してきている。

小中学校で主体的・対話的で深い学びを追求するにあたって、体験や実験等を通した大きな学びをみずすとき、相談窓口として理科学教育の話題にも上がった豊橋工業高校のような存在があるととてもありがたい。

<内浦 教育委員>

特別支援に関するアンケートの内容が濃く、大きい声も小さい声も拾い上げており充実しているし、そこから現場の様子が浮かんで見えてくる。

現場から見て、特に重要だと思われる内容があれば教えていただきたい。

<牟呂小 久野校長>

特別支援教育分科会での結論は、「子どもたちの育ちを見守っていく」ことである。それ以外の注視すべき箇所や今後重点的に取り組んでいく箇所には下線を引いてある。

＜豊橋聾学校 加藤教頭＞

子どもへの支援、保護者、担当教員を対象にした相談窓口を開いており、言語に関する相談など、本校のセンター的機能を活用していただいている。今後は、豊橋市から東三河地区に広げていけば、小中高校現場の困り感が軽減されていくのではないかと考えている。

＜豊橋西高 西牟田校長＞

どの学校にも支援を必要とする生徒は在籍しているので、「個別的教育支援計画」による有利不利という概念（壁）を越えたい。合格者説明会の場で、校長として「個別的教育支援計画」の提出を保護者に依頼している。保護者が相談しやすい雰囲気を整えることが大切であると考えている。

◎【食育・食農教育の状況報告】山本誠二 教育政策課長

■食育・食農教育の小中高特連携教育について説明

食育・食農教育は、2005年に制定された食育基本法の中でも、生きるための基本的な知識として、また道徳や体育教育の基礎となりうるものとして位置付けられている。本市としては、教育振興基本計画の中で、学校だけでなく家庭や地域との連携を図りながら、生きていくために欠かせない食とそれを生産する農業とを一体的に学ぶ事業として、食育・食農教育を位置付けている。

数年前、本協議会において、食育・食農教育を分科会にするかという議論をしたことがあった。当分の間、食育・食農に関する専門的な知識を有する東三河の高校教員の協力を得て、できることを模索しながら着実に実践を積み重ね、現在に至っている

平成29年11月、福岡小学校の3年生は、地元の次郎柿を摘果し、食農サイエンス科を設けている新城高校のお力添えを得て作ったジャムの試食をした。

豊丘高、豊橋南高、本市中学校の家庭科教員が食育・食農に関する情報交換を重ねてきた。今後、継続していく内容や授業公開・授業研究、共同制作等の場を作れるかどうかの議論を3月上旬の会合で行う。

2 その他

(1) 東三河小中高特連携教育の推進について

■加藤英雄 東三河教育事務所指導主事より東三河小中高特連携教育推進状況（3つの具体事業）について説明

○キャリア・フレッシュセミナー

10月28日に豊橋市のライフポートとよはしで開催した。東三河8市町村の中学校1年生に、東三河高校の学科紹介と高校生徒との語らいを通して、将来の夢や進路を考える機会にしてもらった。

中学1年生が約400名集まり、東三河の高校10校の高校生から学校生活の話を聞いたり、疑問や悩みを高校生と話し合ったりした。

○人事交流会

学校種を越えて交流している教員を招いて、交流の実際や勉強になったことなどを各校種の管理職に向けて語ってもらった。交流者全員が、元の校種に戻ったときに生かせる財産を得ており、生き生きと語っていた。

○実業高校における初任者研修

先行実践をしている豊橋市の取り組みを参考にした。10月25日に実業高校を会場にして初任者研修を実施した。講話や授業参観を通して視野の広がる一日になった。

<豊丘高 本多校長>

次年度以降の高校や学科の入れ替えについて、もう少し詳しく教えていただきたい。

<東三河教育事務所 加藤主事>

できるだけいろいろな学科を紹介していきたいが、限られた学科もあるので、校長先生方と相談（調整）をしながら進めていきたい。

■高橋協議会委員長より、オブザーバーに発言をもとめる提案あり。

<豊川市教育委員会 仲田指導係長>

○豊川市での取り組みを紹介

- ・愛知県のキャリアコミュニティープロジェクトを受けて小中高の連携を行った。職員間の交流、中高合同キャリア講演会、ものづくりを軸にした小中高連携、小中合同の講演会、英語を通じての小中高の教育交流会など

○不登校児童生徒を減らすための取り組み

- ・中1ギャップ軽減に向けて、小学生が中学校の英語授業を体験するなど各校工夫をしている。小中高特校の各段階においての不応を少しでも軽減できるように、また、一貫した取り組みができるように、子ども理解に努め、子どもの学びを捉え続けることを大事にし、子どもを中心に据えた連携をいっそう深めていきたい。

<新城市教委 鈴木あき子指導主事>

- 小中高特の学校種の枠を超えて授業参観をするという連携に感心した。また、異校種での児童生徒の学びの様子を、教員が互いに参観することは、素晴らしいと思うとともに、各学校での学びが線でつながっていることを強く感じた。

○新城市では小中連携はとれている。小学生が高校に行って高校生に教えてもらう実践を行っている。作手地区は小中高校の連携が行われている。

○新城東高校を会場にして数学の楽しさに触れる数学チャレンジ（新城市アクティブ事業）を数十年続けている。

<教育長>

豊橋市の制度上の情報共有をする。

- ・学期制については、平成32年度からは3学期制をとる。
- ・平成30年度から朝6時の段階で暴風警報が発令されていたら休校とする。
- ・夏季休業中のお盆の時期三日間を閉庁日とする。

<東陽中 池崎校長>

本会の立ち上げに指導主事として関わってから10年ほどが経過する。立ち上げ当初は、小中高校の人の交流と情報の交流・共有が主な内容だった。本日のキーワードとして、子どもたちに「楽しい」「好き」と思わせる教育、問題解決的な学習、課題研究などがある。小中高特学校が連携して進まなければならない方向性が出てきており、確実にこの会は進歩している。本会の目的は「連携」と「系統化」。これまでは「連携」であったが、ここに来て「系統化」にシフトし、最終的には子どもの生きる力を育成するという目的どおりの方向へ進み始めた。本会に、これからも期待をしたい。

■教育政策課長から、次回開催時期の提案があり、了承される。

○次回開催日 平成30年6月上旬

○開催場所 未定

■高橋協議会委員長の閉会の言葉により、閉会